

“自分が誰なのか、ようやく分かるようになった。
かつての自分を取り戻しつつある。
あの人の考え方に染まってしまっていた”

—— Apolline

WHAT DOES IT MEAN
TO BE FREE ?

暴力の鳥籠を 生き延びて

PHOTOGRAPHS BY JULIETTE DUPUIS CARLE

DV（ドメスティック・バイオレンス）の恐ろしさは、身体的な傷だけでなく、人の心を根底から破壊する心理的支配にある。「鳥籠」に閉じ込められ、意思を奪われ、自分という存在が消されていく。DVを経験した女性にレンズを向けるドキュメンタリー写真家のジュリエット・デュビュイ・カールは、彼女たちを「被害者」としてではなく、壮絶な過去を闘い抜いた「ヒロイン」として描いている。暴力の現場だった部屋を安らぎの場所に変えたアポリーヌ

又や、裁判官を目指すクロエなど、自由をつかみ取った女性たちは自分の人生を自分のために生きようとしている。この写真プロジェクトに参加し、自らの言葉で過去を語るという過程そのものが、彼女たちの傷を癒やす。フィルムカメラが生み出す緩やかな時間の中で、女性たちは自分のもろさをさらけ出し、奪われた生命力を取り戻していく。痛みを決して美化せず、内なる強さと輝きを映し出す写真は、女性たちが歩んできた道のりの確かな証した。

N

アポリーヌ(26)

19歳の時に付き合い始めた元パートナーは、1年が過ぎた頃から精神的な攻撃をするようになり、次第に身体的暴力へとエスカレートしていった。アポリーヌは過酷な抑圧によって「自らのアイデンティティーを失っていった」が、友人の助けでようやく解放された。トラウマの記憶が残る部屋にあえて住み続け、心地よく自分を包み込む「繭」のような場所へと作り変えた彼女は、過去を乗り越える象徴として、そこを撮影場所に選んだ

“自分の経験を理解する必要があった。
それがもう二度と私に
影響を与えないようにするために”

—— Virginie

ビルジニー(47)

女性パートナーからの暴力と、その後の執拗な嫌がらせに苦しんだビルジニーを救ったのは、2020年の新型コロナウイルスによるロックダウンだった。自宅でアート制作に没頭することで引き裂かれた日常を再生させた。支配の呪縛を解くために費やしたひきこもり生活は2年間に及んだ。隔離期間中、自分が生存しているサインとして毎日窓辺につるし続けた風船の数は4201個に上った



“まるで嵐の中にいるようで
何が起きているのか
分からなくなっていた”

—— Chloé

クロエ(19)

最初の交際相手から性的暴行を受け、何年も鬱病に苦しんでいた。そんな中で出会った男性は、クロエを助ける「ヒーロー」を演じながらも、彼女の心を巧みに操り、おとしめた。「あの人の有害な行動や態度を自分で内面化してしまったのではないかと、全て自分のせいだったのではないかと」今でも葛藤を抱える。それでも、裁判官を目指して法学を学ぶことで、過去と対峙し、他者を守る側の人間になるための道を一步步歩んでいる



ガエル(44)

元夫から19年間にわたり、精神的、身体的、性的な虐待を受け続けた。暴力から解放された後、動物看護師の資格を取得し、現在は多くの鳥や犬と暮らしている。1年前に離婚は成立したものの、元夫が行政手続きを意図的に滞らせているため、過去の記憶が残る自宅の売却を進められずにいる。これは、裁判が終わった後も、なお相手を縛り続けようとする虐待者の典型的な手口だ



“身体的な暴力はすぐに忘れてしまう。
何よりもつらいのは精神的な暴力だ”

—— Gaëlle

“末息子が生まれて私は強くなった。
それまでの私は存在していないような状態だった。
元夫の暴力によって人生が奪い去られていたから”

—— Elena



エレナ (80)

31年もの間、元夫からの激しい暴力と支配にさらされ続け、常に恐怖に怯えていた。3人の子供がいたが、夫は自分だけの世話をしろと要求した。ダウン症であることから父親に拒絶された末息子のアベル

を守るため、数年がかりで準備を進め、1994年にアルジェリアからフランスへ移住した。「私が受けた仕打ちによって、子供たちにも消えない後遺症が残っている。彼らは全てを聞いていた」

▶ Photographs by Juliette Dupuis Carle |

撮影:ジュリエット・デュビュイ・カール パリを拠点とするドキュメンタリー写真家。人道支援活動に携わった経験を基に、社会的マイノリティーの表象、女性に対する暴力がもたらす精神的・身体的影響をテーマに作品を制作し、政府機関や施設で広く展示されている。2025年仏「ZOOMSパブリック賞」を受賞

“自分も周りの人たちも私のパニック発作は
単に失恋のせいだと思っていた。
私が傷つきやすく、ロマンチストなだけなのだと”

—— Florence



フロランス (33)

暴力的な元パートナーとの生活を乗り越え、プロの文筆家として活動するフロランスは、自身の壮絶な経験をグラフィックノベルで発表した。今は、女性だけのグループで山を登り、自分自身の道を取り戻そうとしている。撮影の日にあえて髪を染め直さず、ひとつにまとめたのは、ウエーブがかった長い髪を下ろしているのが「女性らしさ」だと言い張った元パートナーへの抵抗でもある

“彼との歴史は、既にそこに存在していた
歴史の上に築かれたものだった”

—— Marine



マリーヌ (54)

元夫から逃れて24年がたつ。10年以上にわたって容姿を否定され続け、ダイエットを強要された。「彼は私を自分の思いどおりの姿にしたがっていた」とマリーヌは振り返る。そうした「目に見えない暴力」は、いつまでも心に残る。元夫による支配を後押ししたのは、女は男に従うべきだという社会の空気であり、かつてマリーヌが母親から言い聞かされ続けた言葉だった